

GAKKAN GAKUFU  33



未来責任果たす復興を

目黒公郎教授

Interview

東日本大震災以降、防災の専門家として様々な活動に多忙を極める中、貴重な時間を割いていただきました。お話は国家天下に関わることから家庭での防災テクニックにまで及び、とても紙面に収まりませんが、精力的なお仕事ぶりをほんの一部、ご紹介します。



■地震の時はどちらにいらっしゃいましたか

学環の7階にいました。高度利用の緊急地震速報(EEW)システムで、強い揺れが襲う約60秒前には宮城県沖で地震が起こったことを知りました。マグニチュードがどんどん大きくなるので、「ついに宮城県沖地震が起こったか」と思いました。まもなく、EEWシステムのカウントダウンとともに激しい揺れが襲ってきました。「揺れの継続時間が長い。ただ事じゃない」揺れが収まった後に、CIDIR(総合防災情報研究センター)の仲間と学環の各研究室を回りました。4つの研究室で内側から物が倒れて、ドアが開けられなくなっていました。

その後、東大全学の対策本部が立ち上がり、そこで今後の予測と対応などを前田副学長と話しました。その中で印象に残っていることに、直後の死者・行方不明者数の扱ひがあります。当初テレビは、100人、200人という数を報道していました。確定情報として扱っていたのだと思いますが、危機管理上は問題です。津波の映像を見れば、「誠に残念だが、数千人、場合によっては万を優に超える犠牲者が出る大災害である」と伝えないと視聴者や災害対応をミスリードします。

■この震災に様々なご対応をされているようですが

研究者の立場から被災地の復興・復興支援を行うためのネットワーク(3.11net東京)を3月13日に有志と設立した他、震災復興に関わる22の学会長に賛同していただき、日本学術会議に「東日本大震災の総合対応に関する学協会連絡会」を設立する支援もしました。

政府への対応としては、地震の2日後に国家戦略室に呼ばれ、震災の今後の推移と対応方針について意見を述べました。私なりに「将来の繁栄の礎となる創造的な復興」という復興ビジョンとそのための方針をまとめました。その後これがどのように扱われたかはわかりませんが、後の政府発表の復興ビジョンと共通する部分もあるようです。4方針とは、「被災地の豊かで安全な生活環境の再興

とともに日本の将来的課題を解決する復興」「政府と被災地のみならず、被災地以外も含めたオールジャパンが協働する復興」「低環境負荷・持続性に配慮した復興」、そして「想定外の・・・」を繰り返さないための「前提条件を再吟味する復興」です。

被災者の皆さんは「元通りがいい」とおっしゃいます。私は「子どもや孫にとって本当にそれでいいのでしょうか?」と尋ねます。災害はその地域が長い時間をかけて徐々に進む将来の様子を、時間を縮めて見せる性質があります。少子高齢人口減少をはじめとする課題について、日本の平均よりもずっと先行している地域の復興は、課題先取り解決型をめざすべきです。そうしないと税金を投じて前と同じ集落を作っても、近未来にはそこに住む人はいない状況になってしまう。未来責任を果たすことのできる復興が、被災地

の将来のために重要であるとともに、この活動を通して日本全体が様々な教訓や経験を得ることが、将来確実にわが国を襲う「首都直下地震」や「東海・東南海・南海の連動型地震」などの被害軽減のために重要なのです。

■子ども向けの防災絵本なども手がけられていますね

大学人なので研究論文を書くことが求められますが、論文はいくら書いても防災には貢献しない(笑)。しかし子ども向けの絵本や漫画は違います。子どもはいい教材さえ用意すれば勉強してくれ、ある程度勉強が進むと自分の家の耐震診断ぐらいできる。子どもがパパやママに「僕んち、地震がきたら壊れちゃうよ。僕死んでもいいの」と言うと、行政から言われていた時には「なんでそんなことしなくちゃいけないんだ」と言っていた親たちが、「それじゃ、なんかしようか」ということになる。さらに重要なことは、その子らがずっと子どもではないということ、防災を学んだ大人になるということです。

■防災をご専門とされた理由をお聞きたいのですが

実はその質問が一番困る(笑)。まあ、格好つければ、医者は患者一人一人を助けるけど、防災はまとめて人助けができると思ったことも。私の「公郎」という名前は母方の祖父が、人様の役に立つ生き方をしてほしい、「公の男たれ」との思いで命名したと聞いていたので、それが潜在意識の中にあっただのかもしれない。

世界の地震防災の立ち上げ活動をこれまで40カ国ぐらいやっていますが、途上国では今年の提言が来年には実現していることもあって、日本以上に発言の重みを感じます。明治時代の雇われ外国人技師や教師みたいな存在かなと思うこともあります。帰りは毎日遅いし、国内外の被災地をはじめ、休日返上で出かけてばかりいるので、女房からは「世界平和=家庭不和、防災=忘妻」などと言われています(笑)。

<3・11>後に学問を志す君たちへ

学環長・学府長 石田英敬

— 4月15日に行われた平成23年度ガイダンス学環長・学府長挨拶より抜粋 —

今年ほど悲しい春はない。これほど不安な4月はない。そのように、誰もが感じていると思います。あのように一瞬にして、私たちの子どもたち、私たちの親しい人々が、突然命を絶たれ、想像を絶する破壊に見舞われ、町が消え去り、人々が塗炭の苦しみのなかに置かれている。

<3・11>からやっとなか月、茫然自失の状態に私たちはあります。

戦後何十年も続いてきていた、「終わりなき日常」の世界が途切れ、いやこれは悪夢のようなものであって、もう一度眠りのなかに潜り込むことができるなら、あの平和なまどろみに舞い戻ることができるかもしれないと思おうとする半分の自分があり、いや、もはやすべてはかつてのようでは決してありえないと、鋭く冴えていく覚醒への感触をたしかに感じとっているもう一人の自分自身がいる。

そのようなThe Day Afterの混濁した意識の<いま>に、私たちの現在時は刻まれています。

そのような「危難の時」に、皆さんは、「学問を志す人」として、今日ここに集っているのだということ、このことを記憶に留めていただきたい。

「学問」はいま大きく傷ついています。「大学」もまた大きく傷ついています。人類は、学問の力で、「自然」をかなりの程度、統御できると信じてきた。科学者たちは、その信にもとづいて、研究を進め技術を開発してきた。

しかし、学問は余りに無力であったのではないか。そして、学問は、そして、学者は、余りに「無責任」であったのではないか。そのような声が、それぞれの学者の脳髓のなかで、通奏低音のように低い声で呟くことをやめません。

真に学問に深くたずさわってきた者なら、分野を問わず、自らの依って立つ学と自分の立ち位置に対する、針のような厳しい倫理的問いを忌避することはできないように思います。

それは、「学問に何が可能か」という問い。私たちの前の世代の学者たちが、世界の破滅と歴史の暗がりのなかで問いつづけた原点の問い、永らく学者たちの念頭から離れかけていた問いの回帰であるのです。

この「倫理(エートス)の問い」を心につねに携え直すことから、学問を志す者は、<3・11>以後の世界に歩み出すことが必要なのだと私は考えています。

バーチャル修了式開催される

3月24日、情報学環・学際情報学府では、教育部研究生修了式と学際情報学府学位記授与式を、Ustreamなどを使いバーチャルに開催しました。例年行われる修了式は、学生にはもちろん、教職員にとってもとても大切なイベントであり、開催を中止するのは忍びなく、かといって学生の代表だけが集まるというのも学環・学府らしくなく、検討の結果、Ustreamで祝辞などを中継するとともに、その録画映像を学生からの修了メッセージとともに学環・学府のウェブサイトにアップすることになりました。

当日中継は約350名が視聴。学環長・学府長の石田英敬氏から「これから大変な時代となるだろうが、学環・学府で学んだことを存分に活かして新たな世界を創ってほしい」などの心のこもった祝辞が送られました。修了生の名前が一人一人読み上げられるとtwitter上で「はい！」と元気よく返事のつぶやきが続いたり、バーチャルで



しかも絆の深さを感じさせる修了式となりました。(教育部委員長:水越伸)

一緒に学んだ仲間と自宅に集まってUstreamを視聴。お互いの修了を喜んだとの報告もありました。

情報学環研究集会

【gakkan@post311】展開中

5月14日に情報学環研究集会【gakkan@post311】第一弾「学問になにが可能か」が福武ラーニングシアターで開催され、石田英敬氏、田中淳氏、池内克史氏



による報告と鼎談が行われました。情報学環的な学問になにが可能かを考え、復興に学際的に向き合っていこうという内容で、参加者約40名が密度の高い議論を展開しました。

同日夕刻から、情報学環とMELL Platz主催(佐倉統研究室、林香里研究室「メディア研究のつどい」、中原淳研究室NAKAHARA-LAB.NET共催)の第二弾公開研究会「大震災後、私たちの考えていること、やろうとしていること」が福武ラーニングスタジオで開催されました。佐倉氏、林氏、中原氏、水越氏の4名が、震災後の心境とそれぞれが取り組む研究の可能性や課題を率直に語り、約140名の参加者が熱気を帯びた議論を交わしました。夕食会にも40名以上が参加、夜が更けるまで話は尽きませんでした。

学環・学府では今後継続して【gakkan@post311】を展開予定です。(企画広報委員長:水越伸)

Topics

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

着任教員自己紹介



金森 修 [かなもり おさむ] 教授

フランス系の哲学・思想史、特にエピステモロジーと呼ばれる流れの哲学を長い間研究してきました。具体的にはバシュラール、カンギレム、フーコーというような哲学者が私の知的基盤を形成しています。ただ最近、私が若い頃好きだった芸術系・文学系の学問領域に再び接近しつつあります。あまり固定的な学問領域に囚われることなく、むしろ一種脱領域的な眼差しと知的運動を自己に課すことを、従来よりも自覚的に行っていくと考えています。



木宮正史 [きみや ただし] 教授

一方で冷戦体制を「利用」しながら経済発展を達成、さらに民主化も達成し、他方で、そうした体制実績に基づいて冷戦体制を自ら克服しようとする、韓国の政治・経済・外交のダイナミックな展開に焦点を当て、第二次大戦後の朝鮮半島および東アジアの歴史的展開を、一次史料に基づいて実証的に分析しています。そして、韓国・朝鮮半島から、戦後の東アジア国際関係を逆照射することで、従来とは異なる戦後東アジア国際関係史像を構築することを目指しています。



佐藤博樹 [さとう ひろき] 教授

社会科学研究所の社会調査・データアーカイブ研究センターから流動教員として異動してきました佐藤博樹です。センターでは、社会調査のマイクロデータの収集、整理、提供を担うデータアーカイブの構築を担当しています。企業の人事管理が専門で、経済学研究科の経営専攻で教育を担当していました。最近の研究テーマは、人材ビジネスと企業の人材活用の関係やワーク・ライフ・バランス支援などです。これらは企業との共同研究として実施しています。よろしくお願いいたします。



森本一夫 [もりもと かずお] 准教授

ムスリム諸社会、特にイランなど中東地域の社会史を専門にしています。学部・大学院で歴史研究者としての教育を受けて以来、アラビア語やペルシア語の「原典史料」を読んで色々考えるというのを主な研究手法としてきました。特に関心があるテーマは預言者ムハンマドの一族を称す人々の地位や役割という問題です。ITASIAでIslam, Muslims and (the new) mediaという授業を開講する予定です。



山田育穂 [やまだ いくほ] 准教授

空間情報科学研究センターから流動教員として異動してきました。専門は、空間情報科学、空間統計学、医療・健康地理学です。住環境と人間の健康の関連性をテーマに、近隣ウォーカーリティ、フード・デザート、身体活動と肥満の問題などの研究に取り組んでいます。これまで米国を中心に研究をしてきたので、日本特有の要素・問題に広く目を向けて行きたいと思っています。よろしくお願いいたします。

人事異動

教員

採用

10/1 加藤綾子 助教
4/1 田中明彦 教授

配置換(転入)

4/1 金森 修 教授 (教育学研究科より)
木宮正史 教授 (総合文化研究科より)
佐藤博樹 教授 (社会科学研究所より)
森本一夫 准教授 (東洋文化研究所より)
山田育穂 准教授 (空間情報科学研究センターより)

配置換(転出)

3/1 辻井潤一 教授 (情報理工学系研究科へ)
4/1 岡田 猛 教授 (教育学研究科へ)
真鍋祐子 教授 (東洋文化研究所へ)
石川 徹 准教授 (空間情報科学研究センターへ)
前田幸男 准教授 (社会科学研究所へ)
柳原 大 准教授 (総合文化研究科へ)

任期満了

3/31 小笠原盛浩 助教 (関西大学へ)

事務職員

定年退職

3/31 鈴木和美 副事務長

配置換(転入)

4/1 杉村聖治 事務長 (数物連携宇宙研究機構より)
菊地みづ子 専門員 (大気海洋研究所より)
飯野洋一 図書係長 (経済学研究科より)
中西雅通 会計係長 (本部資産課より)
松本健一 専門職員 (会計係長より)
鈴木佐智子 学務係員 (本部国際交流課より)

配置換(転出)

4/1 柳田則幸 (経済学研究科・事務長へ)
永嶺重敏 (人文社会系研究科・主査へ)
竹田智彦 (医学系研究科・主任へ)
小暮弥生 (政策研究大学院大学へ在籍出向)

「あいうえお画文」 授賞式&トーク

開催のお知らせ

水越研究室では5月より「文の京・大いなる学び」(文京区・東京大学連携事業)の一環として、「あいうえお画文～写真で投稿!まちの思い出つむぎプロジェクト」を東京ケーブルネットワーク株式会社(TCN)との共催で進めています。本プロジェクトは、アルバムやデジカメ、携帯電話の中にある写真を持ち寄って、三文字のお題に写真をつけた「あいうえお画文」を作りながら、みんなで地域の思い出を表現したり、共有することを目指すメディア実践です。

7月には「あいうえお画文」作品の各賞を発表する授賞式とパネルディスカッションを行います。ぜひご参加ください。(特任研究員・鳥海希世子)

◆ウェブサイト:<http://gabun.jp>◆

日時:7/24(日)13:30~16:00

場所:文京シビックセンター地下2階区民ひろば

司会:田畑めぐみ(TCNキャスター)

登壇:水越伸、阿部純、鳥海希世子ほか

優秀修士論文発表会

平成22年度学際情報学府の優秀修士論文発表会が、2月28日福武ホールにて開催された。当日各コースから選ばれた1名ずつ、計5名による発表が行われ、審議の結果、文人コースの松山秀明氏が学府長賞に輝き、表彰された。論文題目は「テレビと都市空間—テレビ・ドキュメンタリーに見る東京イメージの変遷」。指導教員は丹羽美之准教授。



記録映画アーカイブ・プロジェクトシンポジウム開催

3月5日と6日の両日、福武ラーニングシアターにおいてシンポジウム「占領期・ポスト占領期の視覚メディアと受容—民主化・冷戦・モダニティ」（主催：情報学環ほか）が開催された。1日目は、「浸透するアメリカ・変容するアジア—CIE/USIS映画とラジオ放送」と題して、4つの報告とパネルディス

カッションが活発になされた。2日目は、「社会科映画と日本の民主化〜発見された常総市コレクション」と題して、4本の映画上映と2つの報告、そして全体討論が行われた。中でも、土屋由香教授（愛媛大学）とグレゴリー・フルグフェルダー教授（コロンビア大学）によってそれぞれ報告された、戦後の市民に向けて（日本のみならず米国においても）の核アレルギー緩和、いわゆる「核慣らし」のための映画が紹介されたことが印象深く残った。

奇しくもその6日後、東日本大震災に伴う原発事故が発生した。（学術支援専門職員 山内隆治）



松阪市の情報政策担当官に

4月1日、三重県松阪市に情報政策担当官の職が新設され、佐倉研D3の渡邊義弘氏が任命された。任期は2年。渡邊氏は市ホームページの刷新に関わる仕様書の作成や開設後の職員研修の他、市情報化推進基本計画(仮

称)策定に向けた資料収集や基礎づくりの監修も行う。これは、市民の情報発信の重要性を訴える渡邊氏のこれまでのさまざまな活動が実ったもので、山中光茂市長から「市民との情報の懸け橋になることを期待する」と激励を受けた。

受賞報告

●「無数の画像群の構図に着目したモノクロ画像の自動Colorization」により、苗村健准教授と森本悠嗣(苗村研OB)が、電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション賞を受賞。これは2010年に行われたヒューマンコミュニケーションに関する優れた研究報告の発表者を表彰するもので、12月15日、電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーショングループシンポジウムにおいて表彰された。

●「リール式リアアクチュエータ」の発明により、武井祥平(苗村研M1)が、第8回東京大学学生発明コンテスト(委員長: 酒井啓司)において、産学連携本部長賞を受賞。本発明は大変ユニークな可動機構を実際に作製してデモンストレーション展示を行なった点が大きく評価された。1月27日、総合研究実験棟において表彰された。

●「デジタルコンテンツ作成のための

イメージベースドモデリング技術に関する先駆的研究」により、佐藤洋一教授が第7回日本学術振興会賞(理工系、委員長: 江崎玲於奈)を受賞。これは人文・社会科学及び自然科学の全分野において、45歳未満で博士又は博士と同等以上の学術研究能力を有する者のうち、論文等の研究業績により学術上特に優れた成果をあげている研究者を対象に審査が行われたもので、3月3日、日本学士院で表彰された。

●論文「Peripheral Vision Annotation: Noninterference Information Presentation Method for Mobile Augmented Reality」により、石黒祥生(暦本研D3)および暦本純一教授が国際学会Augmented Human2011で最優秀論文賞を受賞。3月14日、お台場で開催された学会会場で表彰された。

●『情報法の構造』の出版により、山口いつ子准教授が3月22日、第26回電気通信普及財団賞(テレコム社会科学賞)を受賞。これは電気通信についての社会科学的又は工学的技術的観点からの優れた著作や研究論文を表彰するもので、本書は、憲法・著作権法という従来からの実定法学と、情報法という新たな法分野の境界・接点について、英米の判例・学説を中心に、様々な角度から論じた労作であるという評価を受けた。

Books

『<オンナ・コドモ>のジャーナリズム—ケアの倫理とともに』

林香里 著 / 岩波書店 2011年1月



本書では、ジャーナリズムの規範にいわゆる「ケアの倫理」を導入してはどうか、という一つの哲学・倫理的問いを提起しています。ブログにツイッター。次々と新しい情報媒体が人気を博している今日、マスメディアの役割が問われています。これまで不可視化されがちだった女性、子ども、高齢者、貧困層、障害者、外国人等（オンナ・コドモ）的な視点から、真の意味での多様なメディア社会とは何かを考えてみました。

『21世紀メディア論』

水越伸 著 / 放送大学教育振興会 2011年3月



ネットやケータイに象徴される、新たな様式をはらんだデジタル・メディアが環境化した21世紀のメディア社会において、メディア論的想像力の涵養を目指す一冊。国家や共同体、文化やリテラシーのあり方が変貌するなかで、未来を見据えるための批判的で実践的な知を育む。メディアの歴史・理論を踏まえ、現在進行形で展開する21世紀メディア社会の相貌をとらえた後、その可能性と課題への取り組みを検討。放送大学大学院教材。

『フラッシュモブズ—儀礼と運動の交わるころ』

伊藤昌亮 著 / NTT出版 2011年2月



人はなぜ集まり、なぜ動くのか。デモとテロの時代の中、フラッシュモブ現象はネットを震源として世界中で繰り広げられ、人間の集合行動の地殻変動ともいべき事態の進行を垣間見せる。若者たちの集合が浮上させるのは、新しい社会のかたちである——日本の2ちゃんねるオフから世界各地のフェイスブック・デモまで、ネット群衆のうねりの中に新たな時代の躍動を探る。

『科学の横道』

佐倉統 編著 / 中公新書 2011年3月



日本は西洋社会をお手本にして、近代化を進めてきました。科学技術もそのときに導入されたものです。明治から150年、科学技術は文化としてどれだけ日本社会に定着しているのか？ それを探るために、芸術家や哲学者、弁護士、県知事など、さまざまな領域の人たちとおこなった対談を集めたもの。いろいろなヒントがみつまっていると思います。是非御一読ください。

編集後記

今年度表紙に寄せて

昨年度のシルバーで統一した表紙は、福武ホールの考える壁を題材にしてみました。今年はその壁に色を記しました。日本という国にそびえ立った壁に、光が戻ってくるような、明るい未来への思いを込めて色を選んでみましたが、色合いは見る人それぞれの心を反映して違ったものに見えるかもしれません。季節感であったり、移りゆく空の色であったり、あるいは着物のぼかし染め、というのはいかがでしょうか。何に見えるか、周りの方との話題にさせていただくと幸いです。(な)

